



2021年2月16日 Cedep × 凸版共同研究シンポジウム

非認知ってなに？なんで大切なの？どう育てるの？



—子育て・保育・教育現場における非認知能力の実際—

遠藤 利彦

(東京大学)



The Center for
Early Childhood Development,
Education, and Policy Research



「認知」信仰の揺らぎ

- 『The Bell Curve』 (1994)

- 人の社会的成功におけるIQの役割を再確認
- 成育家庭の富裕さよりもIQの予測力が大きい
- IQの遺伝的規定性の高さ
- IQに従った社会的階層の形成・固定化
- 「遺伝的ポテンシャルに乏しい」**貧困層の子どもおよび家庭に補償教育・福祉措置の「無駄」**
- 貧困層中心の福祉は「遺伝的にIQの低い」人口の増加を招来→国全体のIQ平均値の低下
- **大きな物議を醸す：イデオロギー的反発**

●『Emotional Intelligence』(1995)

- 感情知性(EI)こそが幸福や適応性の枢要な鍵
- EIの後天的獲得可能性の高さ
- EIを通じた社会的可動性(EIで人生は変わる)

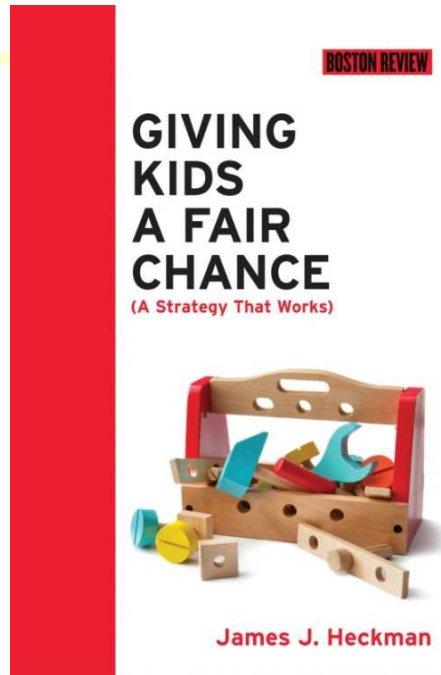
「EIとは“successful person”の要件」

- EIやEQは平等主義的思潮にも後押しされて、一気に人口に膾炙→殊に欧米における隆盛
- 学術的研究もさることながら、時に「EIビジネス」と揶揄されるほど職業領域での応用が盛ん
- EIと「非認知」なるものは実質的にほぼ同じ
- が、日本での教育界での注目は今ひとつ



生涯発達の土台としての「非認知」

—「非認知」的な心 ≡ EI ≡ 自己と社会性の力—

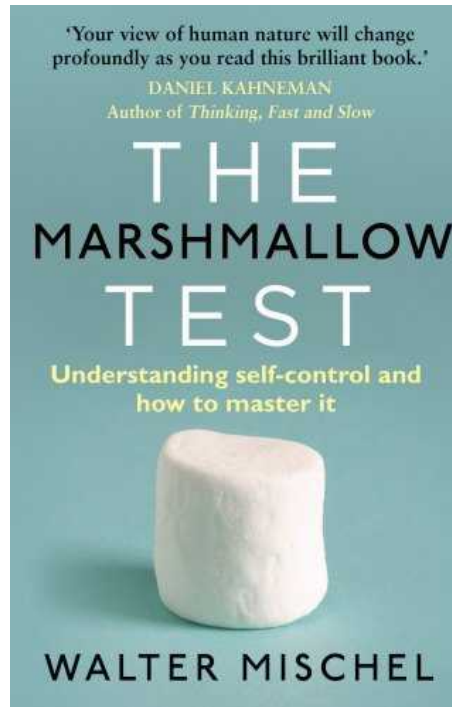


Heckman, J. J. (2013) Giving kids a fair chance. The MIT Press.

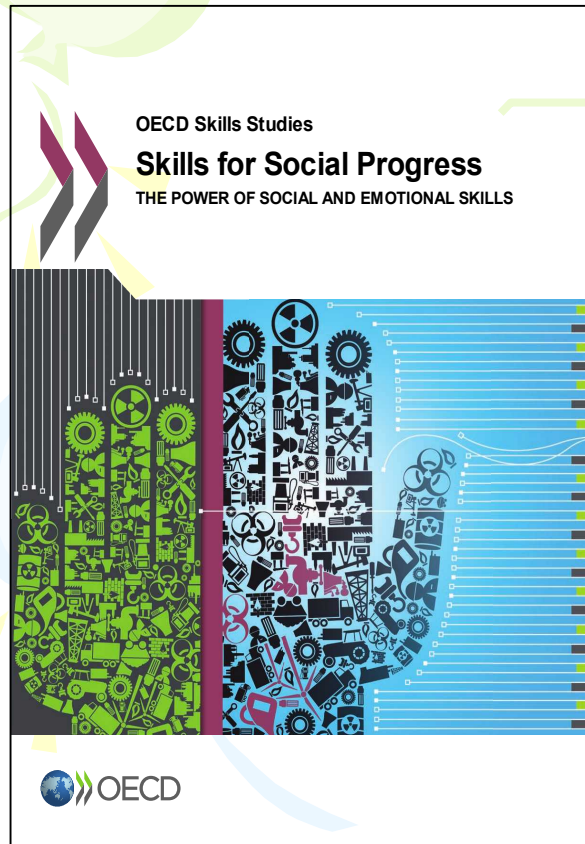
ジェームズ・ヘックマン(労働・教育経済学:2000年ノーベル経済学賞)

- ・子どもに対する教育投資効果→乳幼児期への投資が最も効果的
- ・就学後の教育の効率性を決めるのは、就学前の子育て・保育の質
- ・乳幼児期への投資は大人になってからの15～17%の利益還元に通じる
- ・ペリー就学前計画:乳幼児期の保育が40歳時の経済状態・幸福を分ける
- ・特に恵まれない環境にある子にとって乳幼児期の保育はきわめて重要
- ・それは「認知」以上に「**非認知**」能力を促すことを通して生涯発達に影響

◇家庭外の大人との関係→「非認知」=EI=自己と社会性の発達を補償

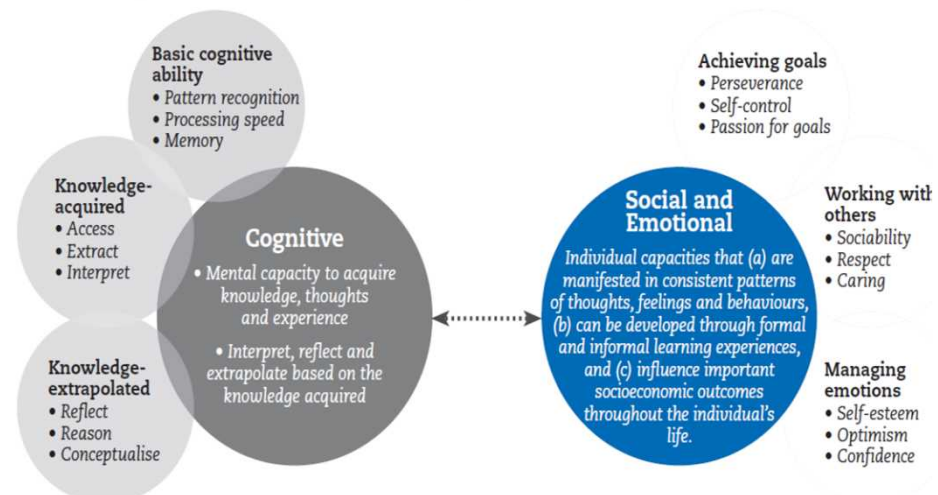


- マシュマロ・テスト: ウォルター・ミシェル 1970年～追跡調査
- 幼稚園4歳児を対象
- 「1個、すぐに食べてもいいけど、15分待っていられたら2個あげるね」
- 1/3が待って2個もらう→その後の学業成績や社会的成功を長期的に予測
- 幼児期の「IQ」(認知)以上に「**自制心**」(**非認知**)が重要
- 「異時点間の選択のジレンマ」(アリとキリギリス) / 「自他間の選択のジレンマ」
- それは社会性にも強く影響をもたらす: 自己利益中心にばかり行動すると仲間の信用を失って長期的には集団の中で幸せになれない(「将来の影」)



- ・認知的スキル／非認知的スキルを区別
- ・非認知的スキル(＝社会情緒的スキル)の効果
 - ・「目標の達成」「他者との協働」「感情の管理」における(a)思考, 感情, 行動の一貫したパターン, (b)学習経験を通して発達し, (c)個人の人生を通して社会経済的に影響

Figure 2.3. **A framework for cognitive, social and emotional skills**



- OECDレポート(2015)が掲げる「非認知」

“Skills for Social Progress : The Power of Social Emotional Skills”

- 「認知」「非認知」スキルが予測する多様な心理社会的適応
- 所得は「認知」だけでは説明され得ない→「非認知」の重要性
- 「非認知」→「認知」の因果関係は“robust”: その逆因果は×
- ターゲットとする「非認知」＝「社会情緒的」スキル
- 個人および社会における生産性への寄与が期待されるもの・成長可能性が見込まれるもの・測定可能なもの
- 「**長期的目標の達成**」 / 「**他者との協働**」 / 「**感情の管理**」
- 「スキルがスキルを生む」(Skills beget Skills)
- 殊に社会情緒的スキルの土台を就学前期に築くことの重要性
→ “**Starting Strong**” 「人生の始まりこそ力強く」



『“vuca”な時代を生き抜く力』

Volatility (激動)

Uncertainty (不確実)

Complexity (複雑)

Ambiguity (曖昧)

Education 2030
(OECD)

Agency (責任主体性) / Co-agency (共同主体性)

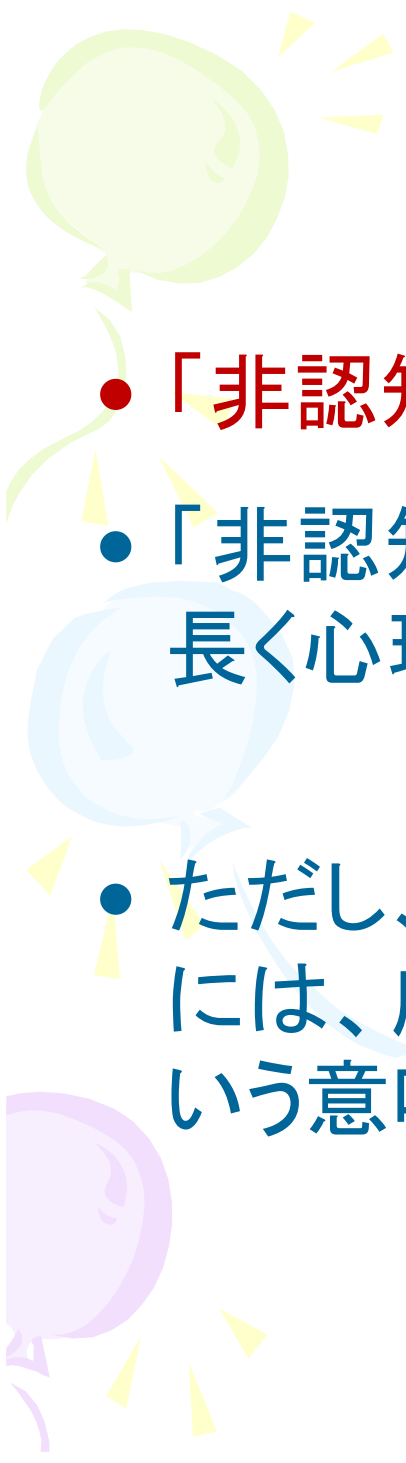
[自己に関わる力] / [社会性に関わる力]

「非認知」≡自己と社会性の力

- 「自己」にかかわる心の性質（→個性化）
（正当な自己評価を有し、自律し、自己向上を図り実現する力）
「自尊心/自己肯定感」・「自己理解」・「意欲/内発的動機付け」
「自己効力感」「自制心/グリット」・「自立心/自律性」 など
- 「社会性」にかかわる心の性質（→社会化）
（集団に溶け込み、他者との適応的関係を構築・維持する力）
「心の理解能力」・「コミュニケーション力」「共感性/思いやり」
「協調性/協同性」・「道徳性」・「規範意識」 など
- 両側面に関わる「感情の制御・調節」(セルフ・コントロール)
（異時点間選択のジレンマ / 自他間選択のジレンマ 解決）



「非認知」教育の課題

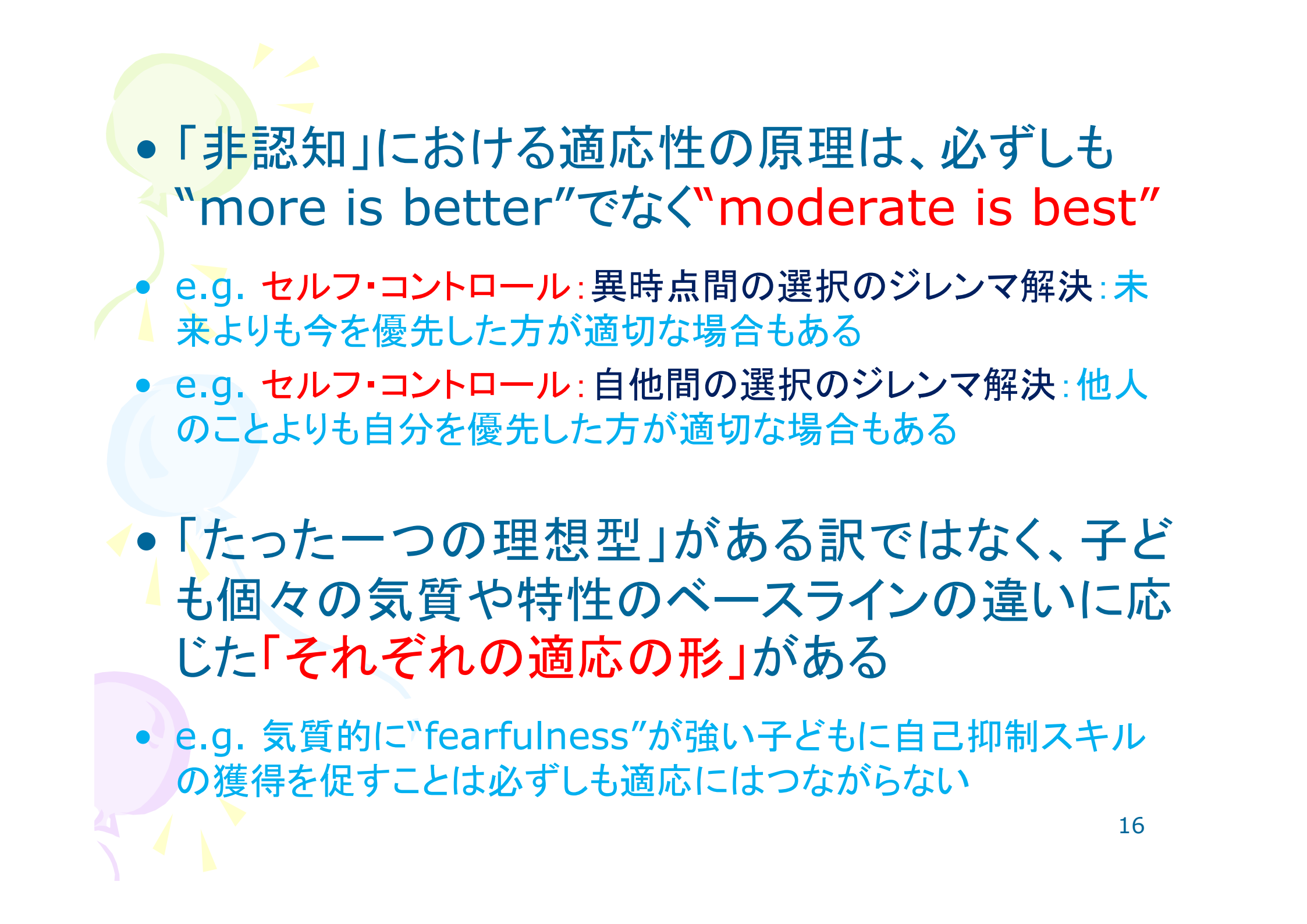
- 
- 「非認知」の重要性→「何を今さら」感
 - 「非認知」≡社会情緒的コンピテンスの発達は長く心理学の主要テーマであり続けてきた
 - ただし、教育経済学を中心とした関心の高まりには、広く社会一般における再注視を促したという意味で、一定の意義あり

- 効果検証の実態

- 不利な状況にある子どもに対する介入研究において一部、多少の「追いつき効果」が見られてはいるものの、標準域にある子どもの力をさらに増進させる「上乗せ効果」が明確に認められている訳では必ずしもない

- 「非認知」教育の効果検証は原理的に難しい

- そもそもいかなる教育的営為が有効か、必要かが特定されてない（何か教え込まれて獲得されるものではなく、日常の経験こそが肝要）
- 「非認知」の各種要素の可視化・測定が困難
- 効果の現れ方がゆるやかで、その検証には相対的に長い時間を要する

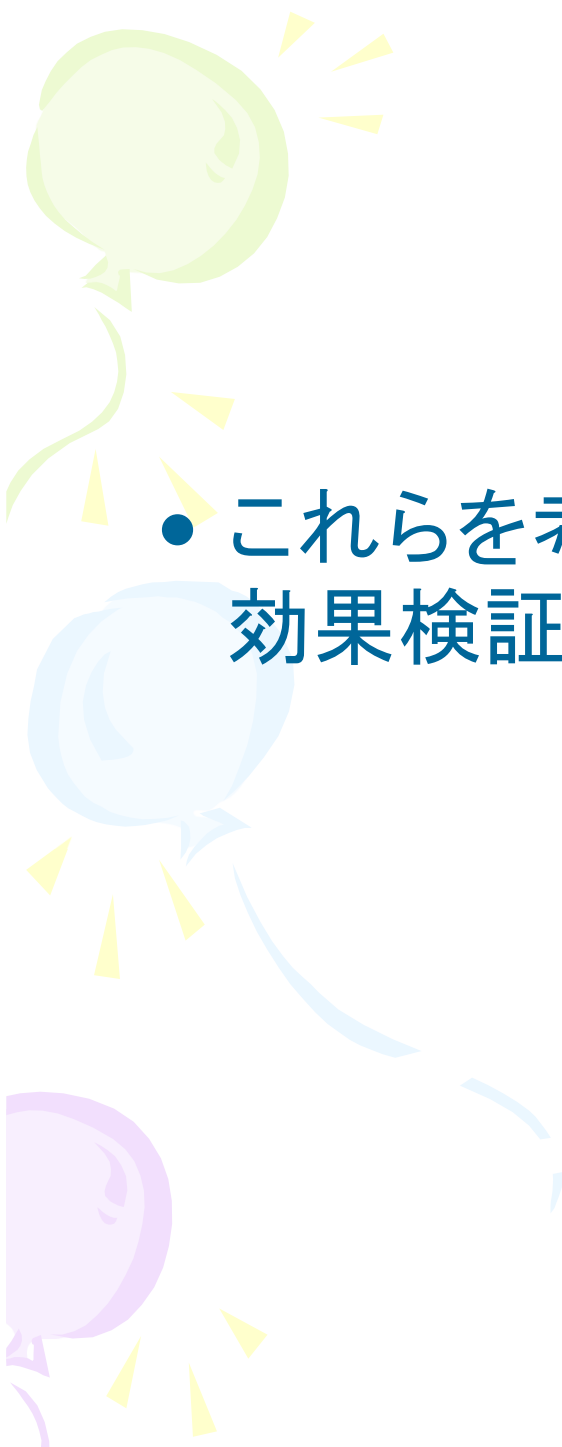
- 
- 「非認知」における適応性の原理は、必ずしも
“more is better”でなく“moderate is best”

- e.g. セルフ・コントロール: 異時点間の選択のジレンマ解決: 未来よりも今を優先した方が適切な場合もある

- e.g. セルフ・コントロール: 自他間の選択のジレンマ解決: 他人のことよりも自分を優先した方が適切な場合もある

- 「たった一つの理想型」がある訳ではなく、子ども個々の気質や特性のベースラインの違いに応じた「それぞれの適応の形」がある

- e.g. 気質的に“fearfulness”が強い子どもに自己抑制スキルの獲得を促すことは必ずしも適応にはつながらない

- 
- これらを考慮した教育的営為の模索・実現と効果検証の方法論の確立が課題

- 
- 「非認知」の各種要素の直接的な引き上げのみを目的にした働きかけの危険性
 - それ自体の向上をいわずらに試みても効果は薄く、むしろ、向上を図るプロセスこそが重要
 - **“Myth of Self-Esteem”**
 - 80～90年代の米国:「社会的ワクチン」としての自尊心引き上げ→効果が認められず
 - 根拠の伴わないただ「賞賛」ばかりによる「から自尊心」向上は何の益ももたらさない
 - 「賢く見せろ」「間違えそうなことはするな」という信念形成→探索・挑戦の意欲や行動を削ぐ危険性も

- 
- 子どもの自発的活動があって子ども自らが一歩でも二歩でも前進した場合に、その努力のプロセスやそこから得られた成果に対して正当な評価・フィードバックを大人が与えることの重要性
 - 何か特別な教育プログラムの実践ということでは必ずしもなく、子どもの一人や集団での遊びや活動、日常生活の質を、周囲の大人が適切な足場かけによって豊かに支え促すことが肝要
 - それを効果的に可能ならしめるためのツールや記録・ドキュメンテーション等の方法の開発